

原 著：秋田大学医短紀要 6(2)：145-152, 1998.

小児看護学実習における保育園実習の効果 — 時期による学生の学びの比較 —

平 元 泉* 野 村 誠 子* 石 井 範 子*

The Effects of Nursery Practice on Child Nursing Education

Izumi HIRAMOTO* Seiko NOMURA* Noriko ISHII*

I. はじめに

小児看護学では、「小児の成長発達を理解し、あらゆる健康レベルの個々の健康上の問題を解決し、成長発達を促すための、小児とその家族へ援助する能力を養う」ことを教授目標としている。子どもの健康に関するすべての問題への対応が含まれており、健康に障害がある子どもだけではなく、健康な子どもに対する健康の保持増進の働きかけが必要である。したがって、小児看護学実習において、病棟のみではなく、外来や保育園・幼稚園など多様な場での実習が行われている。特に保育園実習は、9割の学校で取り入れていると報告されている¹⁾。

一方、小児人口の減少や入院期間の短縮化などにより、実習施設の不足が問題となっている傾向にある。秋田大学医療技術短期大学部（以下、本学）においても、小児科病棟での学生が集中しないような配慮が必要となっている。そのため、3週間の実習期間のうち、1週目と3

週目に分散させて、保育園実習を行っている。保育園実習は、病院実習に先立って行われることが望ましいとされている²⁾が、病院実習後の保育園実習についても、学びの差異はないという報告もある³⁾。

そこで、本調査において、保育園実習の時期による学生の学びの違いがあるかを明らかにし、効果的な実習方法について検討することを目的とする。

II. 調査方法

- 1) 対象：秋田大学医療技術短期大学部看護学科3年生82名（女子78名、男子4名）のうち、平成9年度小児看護学実習で、1週目と3週目に保育園実習を行った70名（女子66名、男子4名）。
- 2) 方法：小児看護学実習最終日に、質問紙により「子どもに対する見方の変化の有無」について調査した。また、「保育園

秋田大学医療技術短期大学部
*看護学科

Key Words: 小児看護学実習、保育園実習

実習で役立ったこと」について自由記載させた。学生の背景との関連を把握するため記名式とした。

- 3) 分析方法：子どもに対する見方の変化の有無について、1週目に実習を行った学生（以下、A群）、3週目に実習を行った学生（以下、B群）の2群について χ^2 検定を用いて比較した。また、自由記述については、文章または段落を対象に類似する内容を分類した。その中で共通した内容のものをまとめて項目名を付けた。次いで、各項目毎の記述件数について、A・B群で χ^2 検定を用いて比較した。

Ⅲ. 保育園実習の概要

1. 臨床実習における小児看護学実習の位置づけ

本学の臨床実習は、1年次に基礎看護Ⅰ実習45時間、2年次に基礎看護Ⅱ実習90時間があり、3年次に成人・老人看護学実習630時間、母性看護学実習135時間、小児看護学実習135時間が行われる。7ヵ所のブロックで、それぞれ3週間の実習が4月から11月までの期間に組まれている。その他に地域保健実習と老人施設実習各45時間を夏季休暇前に行っている。

2. 小児看護学実習と保育園実習との関連

実習病棟は秋田大学医学部附属病院の小児科病棟1ヶ所のみである。1回の実習学生数は11～12名である。3週間の実習のうち1週間は保育園実習と外来実習とし、病棟での実習は2週間である。病棟での実習が2週間継続できるように、保育園実習と外来実習は1週目と3週目に組み入れている。ただし、保育園の都合で2週目に行う場合もある。学生は5～6名の2グループに分かれて実習している。

3. 保育園実習の目的・目標および方法

- 1) 目的：乳幼児とのかかわりを通して、健康な乳幼児を理解する。
- 2) 目標：
 - (1) 乳幼児の成長発達の特徴を理解する。

- (2) 成長発達に応じた保育の実際を学ぶ。

3) 方法：

- (1) 実習期間：2日間
- (2) 実習時間：8時30分～16時30分
- (3) 実習施設：秋田市内保育園（3ヵ所のうちのいずれか1施設に予め学生を配置）
- (4) 実習方法：
 - ① 0歳～5歳児までのいずれかのクラスを受け持ち、担当保育士の指導を受けながら保育に参加する。
 - ② 受け持ち以外のクラスの保育状況および児の観察は見学によって補う。
 - ③ 2日目にカンファレンスを行う。
 - ④ 所定の保育園実習記録用紙（B5版）に記録し、教員に提出する。

Ⅳ. 結果

回答者数は70名（有効回答率100%）であった。

1. 学生の背景

1年次の小児看護学の講義開始前に、同胞の有無、子どもとの接触経験の有無（「今まで子どもと親しい関わりを持った経験があるか」）、子どもに対する気持ち（好き、嫌い、どちらでもない）について、質問紙による調査を実施した。その結果、同胞の有無については表1の通りであった。一人っ子は2名（3%）と少なく、A・B群に有意な差はみられなかった。

子どもとの接触経験では、経験がないと答えた者は5名（7%）のみで、ほとんどの学生はなんらかの接触経験を持っており、有意な差はなかった（表2）。

子どもに対する気持ちについては、表3の通りであった。どちらでもないおよび嫌いと答えた者は全体では13名（19%）であった。両群に有意な差はなかった（表3）。

病院実習における学生の受け持ち患児については、表4の通りであった。全体では乳児19名（27%）、幼児31名（44%）、学童20名（29%）で、両群に有意な差はなかった。

表 1 学生の背景 (同胞の有無)

単位：人

	兄弟姉妹	兄 姉	弟 妹	同胞なし	計
A 群	3	12	19	0	34
B 群	4	8	22	2	36
計	7 (10)	20 (29)	41 (58)	2 (3)	70 (100)

() 全体の%

表 2 子どもとの接触経験の有無

単位：人

	有り	無し	無回答	計
A 群	32	2	0	34
B 群	31	3	2	36
計	63 (90)	5 (7)	2 (3)	70 (100)

() 全体の%

表 3 子どもに対する気持ち

単位：人

	好き	どちらでもない	嫌い	無回答	計
A 群	28	3	3	0	34
B 群	28	5	2	1	36
計	56 (80)	8 (12)	5 (7)	1 (1)	70 (100)

() 全体の%

表 4 病院実習における受け持ち患児

単位：人

	乳児	幼児	学童	計
A 群	6	17	11	34
B 群	13	14	9	36
計	19 (27)	31 (44)	20 (29)	70 (100)

() 全体の%

表5 実習後の子どもに対する見方の変化

単位：人

	変化あり	どちらでもない	変化なし	計
A群	20	5	9	34
B群	25	6	5	36
計	45 (64)	11 (16)	14 (20)	70 (100)

() 全体の%

表6 自由記述の項目と記述数

項目	記述数
1) 乳幼児の成長発達の特徴の理解	36 (33)
2) 成長発達に応じた保育の理解	42 (39)
3) 保育園の意義に対する理解	8 (8)
4) 病児との関わり方	22 (20)
合計	108 (100)

() %

2. 小児看護学実習後の子どもに対する見方について(表5)

3週間の実習を終了した時点で、子どもに対する見方が実習前と比較して変化した者は45名(64%)であった。どちらでもないが11名(16%)、変化しないが14名(20%)であった。両群に有意な差はなかった。

3. 保育園実習が役だったことについて(表6・7)

記述件数は、A群57件、B群51件、合計108件であった。

記述内容を分析した結果、1) 乳幼児の成長発達への理解、2) 成長発達に応じた保育の理解、3) 保育園の意義に対する理解、4) 病児との関わり方に対する理解の4つの項目に分類された。各項目の記述件数は、成長発達に応じた保

育の理解42(39%)、乳幼児の成長発達への理解36(33%)、病児との関わり方に対する理解22(20%)、保育園の意義の理解について8(8%)の順であった。

各項目毎にA・B群の記述内容を比較した結果、以下の通りであった。

1) 乳幼児の成長発達への理解

記述内容は(1)各年齢に応じた成長発達への理解、(2)子ども本来の姿の理解、(3)個人差の理解、(4)遊びと子ども、(5)けんか子ども、などであった。項目全体の記述件数は、A群18(32%)、B群18(35%)で有意な差はなかった。

2) 成長発達に応じた保育の理解

記述件数はA群25(44%)、B群17(33%)で有意差はなかった。記述内容は、(1)成長発達に応じたしつけのしかた、(2)遊びへの

表7 保育園実習が役だったこと

記述項目 / 記述内容	記述件数	
	A群	B群
1) 乳幼児の成長発達の特徴の理解		
(1)各年齢に応じた成長発達の理解	12	10
(2)子ども本来の姿の理解	1	3
(3)個人差の理解	0	1
(4)遊びと子どもの理解	5	2
(5)けんか子ども	0	1
(6)その他 ・現代の子どもの考え方	0	1
計	18	18
2) 成長発達に応じた保育の理解		
(1)成長発達に応じたしつけのしかた	6	5
(2)遊びの援助 ・保母から教えてもらった折り紙や廃材利用のおもちゃが役だった ・年齢に応じた遊ばせ方の活用 ・集団遊びへの活用	13	0
(3)子どもとの接し方・姿勢 ・乳幼児への接し方の理解 ・積極的に話しかけることができるようになった ・子どもへの免疫がついた ・人見知りの子どもへの接し方 ・子どもの目線で見たり考えたりすること ・あやし方 ・子どもの言うことをゆっくり聞いてあげることができるようになった	6	9
(4)健康な子どもに対する看護の必要性の理解 ・健康な子どもに対する成長発達を促す援助の必要性の理解 ・すべての子どもに成長発達に応じた世話が必要	0	3
計	25	17
3) 保育園の意義に対する理解		
(1)保母と子ども ・保母の関わり方	4	0
(2)集団保育の特徴 ・基本的な生活習慣の確立が早い ・集団で生活することや交流の重要性	3	1
計	7*	1
4) 病児との関わり方に対する理解		
(1)看護婦の関わり方 ・母親と協力しあうことの重要性 ・個々の子どもの性格や個人差を考えて接するあたたかさが保母より不足 ・子どもとの信頼関係が保母より不足	0	3
(2)病児との接し方 ・健康な子どもとの共通点を探り対処法を考えること ・健康な子どもの発達を基に病児を観察すること ・病児の本来いるはずの環境を念頭に近づける努力をすること ・病児も健康であればこうだろうと考えながら行動できた ・病児の発達を促すための援助 ・回復への援助が具体的にイメージできた ・健康な子どもと同様に厳しくする必要のある事	7	6
(3)病児への思い ・患児への看護の影響の大きさ実感した ・患児ががんばっている姿に感動し、接する気持ちが変わった	0	6
計	7	15*
合計件数	57	51

*p<.05

援助, (3) 子どもとの接し方・姿勢, (4) 健康な子どもに対する看護の必要性の理解の4つであった。記述内容毎にみると、「遊びへの援助」について記述したのはA群のみ13で、B群には見られなかった。また、「健康な子どもに対する看護の必要性の理解」についての記述がみられたのはB群のみ3であった。項目全体の記述件数では差は認められなかったが、学びの内容には違いが認められた。

3) 保育園の意義に対する理解

記述件数は、A群が7(12%)でB群1(2%)よりも有意に多かった($p < .05$)。記述内容は、(1) 保母の関わり方, (2) 集団保育の特徴, であった。「保母は子どもが心を開くような接し方をしていると思った」など、「保母の関わり方」について記述が見られたのはA群のみ4であった。

4) 病児との関わり方

記述件数は、A群7(12%), B群が15(30%)で、B群の記述数が有意に多かった($p < .05$)。記述内容は、(1) 看護婦の関わり方, (2) 病児との接し方, (3) 病児への思い, であった。「看護婦の関わり方」について、記述が見られたのはB群のみ3であった。また、「患児が、がんばっている姿に感動し、接する気持ちが変わった」など「病児への思い」について記述が見られたのもB群のみ6であった。

V. 考 察

1. 学生の学びに関連する要因について

本調査は、保育園実習の時期が、学生の学習効果に影響を及ぼすかを明らかにしようとするものである。したがって、学生の学習効果と関連があるとみなされる他の要因として、学生の背景(同胞の有無, 子どもとの接触経験)や子どもに対する気持ち, 小児看護学実習における受け持ち患児についても調査を行った。以下、これらの要因について分析する。

1) 学生の背景

看護学生の子どもへの関心度は、同胞数や出生順位と関連がないが、子どもとの接触経験の有無やその内容に関連しているという報告があ

る⁴⁾。一方、木村⁵⁾は子どもとの接触経験の有無とは関連しないと報告している。本調査では同胞数は調査しなかったが、いわゆる一人っ子は2名のみと少なかった。約7割の学生は弟妹がいることから、自分より年下の者との接触経験があると推測される。子どもとの接触経験の有無では経験がない者が5名のみで、前述の木村の調査よりもその割合が少なかった。

2) 子どもに対する気持ち

看護学生の子どもに対する情動反応について、木村の調査では、「子どもが嫌い」という者の割合は16%⁶⁾、田淵らの調査では、「どちらともいえない・嫌い」の割合は約20%⁷⁾という結果が報告されている。本調査においても、どちらでもない・嫌いという学生の割合は約20%で、ほぼ同様の結果であった。この結果を多と見るかは意見の分かれるところでもあるが、子どもを主な対象とする小児看護学の教授において、このような学生が存在することを念頭に置いた指導が必要であると考えられる。

3) 小児看護学実習における受け持ち患児について

小児看護学実習では、実習期間中に原則として1名の患児を受け持ち、看護過程を展開する。対象となる小児は、主に乳児・幼児・学童である。どの発達段階の患児を受け持つかによって、学習内容が異なるのは当然であろう。小児の特徴を有効に学ぶためには、乳幼児期が望ましいと言われている⁸⁾。しかし、小児各期の特徴を学ぶためには、乳幼児期に限定するのは十分とは言えない。また、実習病棟の入院患児数からも選定に苦慮するところである。したがって、本学においても、実習グループ内に必ず小児各期の子どもが受け持ちになるようにし、カンファレンスなどでお互いのケースから学べるように配慮している。したがって、2群に受け持ち患児の偏りはなかった。

以上の結果から、1) 学生の背景, 2) 子どもに対する気持ち, 3) 小児看護学実習における受け持ち患児, の3つの要因について、2群に明らかな差はなかったので、保育園実習の時期のみを変数として、学生の学びを比較するこ

とにした。

2. 保育園実習の時期による学びの比較

学習効果を評価する指標として、今回は小児看護学実習前後の子どもに対する見方の変化の有無と、保育園実習が役だったことについての自由記述内容の分析を行った。以下、この2点について述べることにする。

1) 小児看護学実習前後の子どもに対する見方の変化

小児看護学実習前後の子どものイメージの変化については多くの報告がある。「子どもに接する機会が少ないまま学習するという現状に加え、行動がイメージに依存する、イメージが知覚・記憶・思考に密接な関係を持ち、看護の対象に対するイメージが看護行為を規定するという前提に立脚している。しかし、イメージの測定用具が異なるため、類似した変数との関係を分析しても、結果が異なる」と指摘されている⁹⁾。この指摘の通り、イメージ調査として子ども観をあらわす50項目についてSD法による因子分析¹⁰⁾や子どもについてイメージが変わったか否かという設問の調査¹¹⁾など多様である。本調査では、「学習によって、対象認知のあり方に質的な変化が生じる」という報告¹²⁾を基に、「子どもの見方の変化の有無」を設問とした。その結果、実習後に変化した者は、全体で約60%であった。「変化しない」、「どちらでもない」の内容を分析する必要があり、「変化した」ことを学習効果とみなすことは十分とはいえないが、本調査の目的である保育園実習の時期の効果を比較する指標として用いると両群に差はなく、学習効果に差はないと言えよう。

2) 保育園実習が役だったこと

保育園実習によって、「乳幼児の成長発達の特徴の理解」や「成長発達に応じた保育の理解」が深まると報告されている¹³⁾。保育園実習の位置づけは、学校によって異なっており、小児看護への導入として2年次に実施しているという報告もある¹⁴⁾。実習目的によって実習方法や教員の関わり方も異なるのは当然であろう。本学では、3年次の小児看護学実習の中に位置づけ、健康な小児の理解を深めることや健康な

小児に対する保育を学ぶように意識づけている。保育園実習後に提出されるレポートにはこれらの視点について書かれており、両群の差について明らかにできないことも予測された。したがって、今回は時期による差の有無を知るため、保育園実習のレポートとは別に、「役だったこと」という自由記述を分析対象とした。この結果、若干の差が認められ、時期による学びの内容にそれぞれ特徴が認められた。

共通している項目は、「乳幼児の成長発達の理解」と「成長発達に応じた保育の理解」であり、先行研究¹⁵⁾と同様であった。しかし、具体的な記述内容では、「遊びの援助」はA群、「健康な子どもに対する看護の必要性の理解」はB群、と片方だけに偏ったものがあつた。保育園実習を行ってから、病院実習を行ったA群は、受け持ち患者に対して、保育園で学んだ「遊び」について活用できたとする学生が多かつたと言える。病院実習の後に保育園実習を行ったB群は、看護という視点での子どもの見方が深まつたと考えられる。

次に、異なつた項目についてみると、「保育園の意義に対する理解」はA群が多かつた。特に、保母と子どもの関わり方についての記述が多かつた。一方、B群は「病児との関わり方」についての項目が多かつた。記述内容を見ると、「看護婦の関わり方」として、保母の関わり方を通して、看護婦のあるべき姿勢について記述しているという特徴が認められた。これは前項目の「保母の関わり方」と同じ内容とみなすこともできる。保母の子どもとの接し方について両群とも学んでいるが、B群は病院実習で看護婦の関わり方の実際を見ているため、看護婦に不足している部分としてより印象づけられたと推察される。また、「母親との信頼関係の重要性」「病児への思い」についても病院実習が先行したことから、自分の経験に立脚して、「看護」への視点で学んでいると言える。

以上のことから、実習後の子どもの見方の変化に大きな影響はないので、必ずしも病院実習前に保育園実習を組み込まなくても良いと考えられる。しかし、「保育園実習が役だったこ

と」についてみると花野¹⁶⁾の報告とは異なり、保育園実習の時期によって、学生の学びの視点が異なる項目があることが明らかになった。したがって、それぞれの違いを念頭にカンファレンスなどによって、補足していくような関わりをしていく必要があるという示唆が得られた。

VI. 結 論

本学では、3週間の小児看護学実習において保育園実習を、1週目と3週目に5～6名ずつ分散して行っている。保育園実習の時期によって、学生の学びの違いがあるか調査した。その結果、以下のことが明らかになった。

1. 小児看護学実習後の「子どもの見方」について、変化したと答えた学生は全体の63%で、保育園実習の時期による差はなかった。
2. 「保育園実習が役だったこと」について、自由記述の内容を比較した結果、「乳幼児の成長発達の理解」「成長発達に応じた保育の理解」の項目に差はなかった。「保育園の意義に対する理解」は1週目の学生、「病児との関わり方」については3週目の学生の記述が多いことが明らかになった。

したがって、保育園実習の時期によって、学生の学びの視点到若干の差があることを念頭に指導する必要があることが示唆された。

VII. おわりに

子どもの入院期間が短縮され、本学の実習病院においても、2週間継続して受け持つケースは少なくなっている。したがって、3週目ではなく2週目の中間に保育園実習を組み入れることも検討している。今回、2週目すなわち中間で保育園実習を行った学生については分析しなかったが、今後中間で保育園実習を行った学生の学びについても調査したいと考えている。

引用文献

- 1) 濱中喜代, 斎藤禮子, 吉武香代子: 小児看護学における臨床実習の実態—その1—実習施設の状況と学習課題を中心に, 日本看護学教育学会誌4(2)72-73, 1994.
- 2) 吉武香代子: 看護基礎教育における小児看護学, 平成5・6・7年度文部省科学研究費補助金(一般研究C)成果報告書, 16-23, 1996.
- 3) 花野典子: 小児看護学における保育所実習の意義, 帝京平成短期大学紀要, 5: 67-70, 1995.
- 4) 鈴木敦子, 山中久美子, 藤井真理子: 家族変動および教育課程の違いからみた本学学生の子どもに対する接触経験と認識の状況, 大阪府立看護短大紀要5(1): 79-87, 1983.
- 5) 木村留美子: 子ども観の研究(1)—SD法による短期大学生の子どものイメージについて—, 日本看護科学会誌12(1): 50-56, 1992.
- 6) 前掲5)
- 7) 田淵和子, 山本捷子: 看護学生の子どもに対する認識や態度に変化を及ぼす実習の影響, 日赤中央女子短期大学紀要5, 47-55, 1984.
- 8) 濱中喜代: 受持患者の選択基準—受持患者決定までのプロセス, Quality Nursing 1(6): 12-15, 1995.
- 9) 舟島なをみ, 定廣和香子: 小児看護学教育研究の動向と今後の課題, 看護教育36(6): 531-535, 1995.
- 10) 前掲5)
- 11) 前掲7)
- 12) 前掲5)
- 13) 藤原宰江: 小児看護学における保育園実習の展開とその学習効果, 看護教育26(11), 689-702, 1985.
- 14) 中新美保子: 小児看護への導入としての保育園実習の検討, 日本看護学会集録, 第24回小児看護, 272-274, 1993.
- 15) 前掲13)
- 16) 前掲3)